臨床実習における学習効果の検討

その2　学生の満足度を中心に

高橋紀美子　仙田洋子　藤原宰江

1　はじめに

本学において昭和47年度入学生が履習した臨床実習は，延1,504時間であり，表1のような計画に基づいて2年次から3年次にかけて実施された。実習は前編（その1）にのべたように独立教科として8科目にわかれて履習されるが，すべての課程を終った時点で学生に得させたいとする能力には共通のものがあると考えられる。

この研究では，これら各科別に展開してきた実習の結果について学生の反応を中心に総合的に評価しようとした。すなわち実習の目標として取り上げたことがらについて学生自身が感じた満足の度合いをとらえ，今後の実習のあり方について検討する資料にしようとしたものである。

表1. 臨床実習マスタープラン

		2年次生			3年次生						
		前期	後期								
教科		総合看護実習Ⅰ	総合看護実習Ⅱ	保健所実習	成人看護実習Ⅰ	成人看護実習Ⅱ	母性看護実習	小児看護実習	成人看護実習Ⅲ	精神科看護実習	総合看護実習Ⅲ
時間数	学外	4時間／週×8回	45時間／週×1回 4時間／週×8回	45時間／週×1週	45時間／週×4週	45時間／週×4週	45時間／週×4週	45時間／週×3週	45時間／週×3週と20時間	45時間／週×3週	45時間／週×4週
	学内	—	—	—	45時間／週×1週	45時間／週×1週	45時間／週×1週	25時間／週×1週	—	—	45時間／週×3週

表3. 満足度別解答数の割合（ ）内は%

	イ	ロ	ハ	ニ	無解答
看護婦	127(18.0)	450(64.4)	120(17.0)	3(0.4)	2(0.2)
保健婦 助産婦	63(14.7)	291(67.8)	57(13.3)	16(3.7)	2(0.5)
養護教諭他	98(15.7)	366(58.7)	136(21.8)	15(2.4)	9(1.4)
計	288(16.4)	1,107(63.1)	313(17.8)	34(2.0)	13(0.7)

表 2　調査表および調査結果

質問項目	回答数(49)					肯定・否定率			希望職種別回答数																
									看護婦(18)					保健婦・助産婦(11)					養護教諭他(16)				
	イ	ロ	ハ	ニ	無	肯定率(%)	否定率(%)	無回答率(%)	イ	ロ	ハ	ニ	無	イ	ロ	ハ	ニ	無	イ	ロ	ハ	ニ	無
1. 看護の方向やあり方がつかめた	2	36	5	2	0	84.4	15.6	0	2	15	1	0	0	0	10	1	0	0	0	11	3	2	0
2. 看護活動の礎地ができた	2	30	11	2	0	71.1	28.9	0	1	12	5	0	0	0	9	2	0	0	1	9	4	2	0
3. 技術的に自信を得た	1	19	23	1	1	44.4	53.3	2.2	1	8	9	0	0	0	5	5	0	1	0	6	9	1	0
4. 組織の中の対人関係について勉強になった	20	18	7	0	0	84.4	15.6	0	8	6	4	0	0	6	5	0	0	0	6	7	3	0	0
5. 看護婦の日常の業務について理解した	3	38	4	0	0	91.1	8.9	0	3	14	1	0	0	0	11	0	0	0	0	13	3	0	0
6. 看護婦の勤務条件について考えた	11	22	11	1	0	73.3	26.7	0	5	9	4	0	0	1	7	2	1	0	5	6	5	0	0
7. 看護婦の人数について考えた	10	25	9	1	0	77.8	22.2	0	7	9	2	0	0	1	7	2	1	0	2	9	5	0	0
8. 看護婦の業務内容について考えた	9	22	13	1	0	68.9	31.1	0	4	11	3	0	0	0	6	4	1	0	5	5	6	0	0
9. 職業人としての気がまえが養われた	5	19	18	3	0	53.3	46.7	0	3	5	9	1	0	0	5	5	1	0	2	9	4	1	0
10. 患者とのラポートがもてるようになった	4	41	0	0	0	100.0	0	0	2	16	0	0	0	1	10	0	0	0	1	15	0	0	0
11. 基本的ニードをチェックできるようになった	3	32	10	0	0	77.8	22.2	0	3	12	3	0	0	0	8	3	0	0	0	12	4	0	0
12. 患者の疾病について理解する方法を学んだ	2	35	8	0	0	82.2	17.8	0	1	14	3	0	0	0	10	1	0	0	1	11	4	0	0
13. 患者の身近な情報を得ることができる	4	36	5	0	0	88.9	11.1	0	2	16	0	0	0	0	11	0	0	0	2	9	5	0	0
14. 患者を個人として理解できる	3	39	3	0	0	93.3	6.7	0	2	16	0	0	0	0	11	0	0	0	1	12	3	0	0
15. 患者の環境について考慮できる	0	38	7	0	0	84.4	15.6	0	0	15	3	0	0	0	10	1	0	0	0	13	3	0	0
16. 得た情報から看護上の問題点をとらえることができる	2	39	4	0	0	91.1	8.9	0	1	17	0	0	0	0	10	1	0	0	1	12	3	0	0
17. 抽出した問題を実践的看護活動に組織立てることができる	1	33	9	2	0	75.6	24.4	0	1	13	4	0	0	0	9	1	1	0	0	11	4	1	0
18. 計画したことが実践できる	2	32	10	1	0	75.6	24.4	0	1	14	3	0	0	0	9	1	1	0	1	9	6	0	0
19. 実践から得たデータを整理し考察を加えることができる	2	33	7	1	2	77.8	17.8	4.4	1	16	0	0	1	1	6	3	1	0	0	11	4	0	1
20. 評価結果を次の計画に活用できる	1	31	12	0	1	71.1	26.7	2.2	1	11	6	0	0	0	8	3	0	0	0	12	3	0	1
21. 患者に対して専門的な立場での助言ができる	1	23	18	2	1	53.3	44.4	2.2	1	10	7	0	0	0	8	3	0	0	0	5	8	2	1
22. 看護科に学んでよかった	32	11	2	0	0	95.6	4.4	0	11	6	1	0	0	10	1	0	0	0	11	4	1	0	0
23. 看護の仕事をやってみたい	19	16	8	2	0	77.8	22.2	0	13	5	0	0	0	2	6	2	1	0	4	5	6	1	0
24. 看護の本質を理解した	2	31	10	2	0	73.3	26.7	0	0	11	7	0	0	0	10	0	1	0	2	10	3	1	0
25. 医療における看護の必要性を理解した	18	25	0	1	1	95.6	2.2	2.2	9	9	0	0	0	5	5	0	1	0	4	11	0	0	1
26. 病院の機能を理解した	1	36	8	0	0	82.2	17.8	0	0	13	5	0	0	0	11	0	0	0	1	12	3	0	0
27. 病院と関係施設ならびに地域社会との関連について理解した	1	23	20	1	0	53.3	46.7	0	0	7	11	0	0	1	6	3	1	0	0	10	6	0	0
28. 医療・看護・福祉等のニュースに対して関心がある	21	23	1	0	0	97.8	2.2	0	8	10	0	0	0	6	4	1	0	0	7	9	0	0	0
29. 看護関係の専門雑誌を読む	1	31	9	4	0	71.1	28.9	0	0	13	5	0	0	0	8	2	1	0	1	10	2	3	0
30. 臨床実習後は将来のあなたの職務を遂行していく上に役立つか	11	32	1	1	0	95.6	4.4	0	5	13	0	0	0	2	8	0	1	0	4	11	1	0	0
31. 看護（広義）の仕事は好きですか	4	29	11	1	0	73.3	26.7	0	2	14	2	0	0	0	9	1	1	0	2	6	8	0	0
32. 希望した仕事をうまくやっていく自信があるか	1	13	27	3	1	31.1	66.7	2.2	0	5	11	2	0	1	3	6	1	0	0	5	10	0	1
33. 自分の選んだ仕事を一生懸命やりたいか	16	28	0	0	1	97.8	0	2.2	4	14	0	0	0	5	6	0	0	0	7	8	0	0	1
34. 性格は自分の選んだ仕事にむいていると思いますか	2	28	11	2	2	66.7	28.9	4.4	0	13	5	0	0	1	6	2	1	1	1	9	4	1	1
35. 自分の希望する仕事をやっていくだけの体力や健康に恵まれているか	13	25	6	0	1	84.4	13.3	2.2	3	12	2	0	1	5	4	2	0	0	5	9	2	0	0
36. 選んだ仕事はやりがいのある立派なものか	26	16	2	0	1	93.3	4.4	2.2	11	5	2	0	0	8	3	0	0	0	7	8	0	0	1
37. ライフ・ワークにしたいか	9	33	2	0	1	93.3	4.4	2.2	1	15	2	0	0	2	9	0	0	0	6	9	0	0	1
38. 生命の尊厳について考えたことがあるか	16	28	1	0	0	100.0	0	0	6	12	0	0	0	4	7	0	0	0	6	9	1	0	0
39. 苦しんでいる人に出合ったらどうするか	7	38	0	0	0	100.0	0	0	4	14	0	0	0	1	10	0	0	0	2	14	0	0	0
合計	288	1107	313	34	13				127	450	120	3	2	63	291	57	16	2	98	366	136	15	9
百分率(%)	16.4	63.1	17.8	2.0	0.7				18.0	64.4	17.0	0.4	0.2	14.7	67.8	13.3	3.7	0.5	15.7	58.7	21.8	2.4	1.4

2 調 査 方 法

昭和 49 年度卒業予定者 48 名に対し，臨床実習の全てを終了した時点で表2のような調査表を配布し，無記名で記入してもらった。用紙は卒業後の進路がほぼ決定した 50 年2月 10 日に教室で一斉配布し，原則として当日中に回収した。配布数は 48 ，回収数 45 ，回収率は 93.8 %である。

調査表は各教科が成文化している実習要項の中から実習目標を中心に 29 項目を取り出し，これに職業感についての質問 10 項を加えて構成した。

これを教員の調査表との対比を考慮して，前編（その1）でとり上げた目的に沿って次の5群に分類した。即ちA：医療の社会的役割を理解する（28，29），B：医療における看護の役割を理解する（1，24，25），C：看護過程が行える（2，3，および10～21），D：現場を理解する（4～8 と26，27），E：職業感（9，23および30～39 ）に分けて考えた。

各問については，イ：肯定，ロ：やや肯定，ハ：否定の傾向，ニ：否定の4段階の選択肢を準備し，自分の考えに最も近いと思うものを選んでもらった。

3 結 果

解答の分布状況は表2，表3の通りで，質問全体について概観するならば，肯定16.4%，やや肯定63.1%，否定の傾向17.8%，否定2.0%の割合となった。

これを肯定群と否定群にわけて卒業後の希望進路別にみると看護婦希望者と進学希望者では82.4%，82.5%の肯定率になるのに対し養護教諭希望者では74.4%と，その率がやや低くなっている。

一方，項目別に肯定，否定の比が高いものをみると，5，10，14，16，22，25，28，30，33，36，37，38，39 に 90 %以上の肯定がみられ，80 %以上の肯定を示すものは1，4，12 13，15，26，35 となっている。反面3，32では半数以上が否定回答をしており，8，9，21，27では 30 %以上が否定回答をした。

選択肢イ，ロ，ハ，ニのそれぞれに4，3，2，1の得点を配して各問ごとにその総和を解答数で除した値を，実習目標の到達度として，目的群別にみるとA：医療の社会的役割を理解する3.05，B：医療における看護の役割を理解する2.84，C：看護過程が行える2.74，D：現場を理解する2.92，E：職業観3.06，でありA，E群に高くC群に低い評価となっている。

「医療の社会的役割を理解する」については，設問が2つにとどまったので明確な表現はでき難いが，「医療，看護，福祉等のニュースに対して関心がある」について97.8%（28）が肯定的な解答をし，しかもそのうちの46.6%が強く関心があると答えていることは注目してよい。このような一般的なマスメディアに関心がある一方「専門雑誌によってもたらされるニュースや動向についての関心」では71.1%と下っている。中でも専門雑誌を「全く読まない」ものが 8.9 %もあることは見逃せない。

「医療における看護の役割を理解する」ことは95.6%（25）が肯定しているが，中でも40%はよくできたと積極的に満足している。しかし看護の動向やあり方，および看護の本質を理解した人は78.9%（1，24）と少なくなり，理解できなかったものが¼弱にも達することは注目せねばならない。

「患者を理解できた」ものは87.5%（10，11，12，14，15 ），情報収集は88.9%（13）ができたとしている。ところが「実践活動を組織だてる」は75.6%（17），「実践から得たデータを整理，考察できる」では77.8%（19），「評価結果を活用できる」のは71.1%（20）と看護過程の後半になるにしたがって到達度は低くなっている。中でも「技術的に自信を得た」ものは

44.4%(3)，「専門的な立場で助言ができる」では53.3%(21)と低くなっているのが目立つ。

「組織の中の人間関係が勉強になった」ものは84.4%(4)，「看護婦の日常の業務について理解した」ものは91.1%(5)，「看護婦の勤務条件について考えた」もの73.3%(6)，「看護婦の人数について考えた」もの77.8%(7)とその率はかなりたかい。しかし「看護婦の業務内容について考えた」ものは68.9%(8)とやや低くなり不充分とする傾向がつよい。また「病院の機能を理解した」ものは82.2%(26)に肯定回答があるのに，「病院と関係施設，地域社会との関連について理解した」者は53.3%(27)と目立って低くなっている。

4 考　　察

全体的には肯定の傾向が強かったが，問題となる事項の2・3について志向するところを探ってみたい。

(1) 一般的な情報源としてのマスメディアの利用に関しては，満足すべき結果が得られたが，専門誌等の講読状況では，利用したと肯定したものは71.1%でややおとっている。しかしこの値は，44年度に本学で行なわれた類似の調査結果[1]の58.6%に比べると，かなり改善されているともいえる。

49年度は看護科行事として三年次生の看護研究発表が計画されたが，研究をすゝめるにあたって学生達の関心が専門誌に集まったこと，ならびに個々の教員が助言の過程で専門書を紹介する機会が多くなったことからも利用率が高くなったことが伺える。しかし活用できる文献の質や量に問題がなかったとはいえない。今後，学生の自主的学習を支えるためにも学生用図書の充実と図書館の利用方法について検討がのぞまれる。

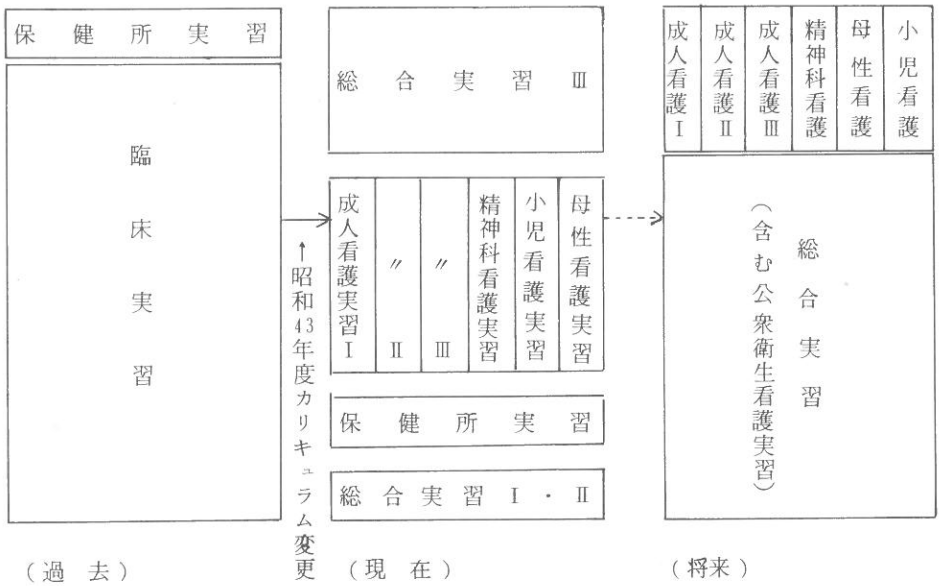
(2) 医療の社会的役割や看護の役割を理解すること，および現場を知ることなど概念的な領域のものでは，一般的に高い達成度を示した。これは前編（その1）にみられた臨床指導教員の評価傾向とほぼ一致しており，両者間の相関が認められる。臨床指導教員の場合にもみられたが理解したということと，時間的，量的に機会が多かったということを学生も全く平行して考えているのではないかと思われる。しかし実際，実習のさ中においてその質的な面における追求はどの程度できたであろうか。看護の本質を理解し難かったと答えたものが12/45名にのぼったことは，その役割をつかみ得たという肯定の量に比して多すぎるように思われる。実際の場面に多くふれたということが必ずしも本質的な理解に結びつかない現実は多いが，この点の誤解を見過すことは許されない。看護実習では従来からその場にいるということに高い価値をおいて来た。そしてその場にいるということは，その場に同化することを要求されることでもある。事実臨床の指導者たちが行う実習評価の中には投影誤差が強くあらわれ，教育そのものよりも，評価者のもつ職業の水準にてらして学生をみる傾向が強いといわれる[2]。そのような環境の中で学生が実務者の職務レベルにあわせて拘束されるとき，その職務者と同じようにふるまおうとする性向はむしろやむを得ないかも知れない。見ること，経験することが，そのものの本質を把えることにつながるという徒弟訓練的な考え方が，今もなお看護の現場の中に残っており，真の意味での学生の発達を妨げているとも考えられる。看護を1つの技能と考え，くり返し熟練することで充分な能力が得られた時代とちがって，現代の看護はすぐれた洞察力と豊富な知識に支えられた判断が土台でなければならないと強調されている。看護の概念は拡大され，対象においても機能においても隔世の変化をとげた。単に手先の器用さだけでは処理できない次元に広がった今，われわれが考えなければならないのは基礎的な領域での教育内容の充実ということである。それは単に実務的技能にとどまるものでないことを明確に認識せねばならない。ウィーデンバックによれば，看護を構成する要因は，哲学，目的，技術，実務である[3]とい

われるが，哲学や目的志向について学生が充分考えられるためには，それに必要な時間が与えられなければならない。そして必要な効果が発揮されるような教育内容の充実と，教員側の条件を整えなければならないと考える。

(3) 看護について観察 ― 判断 ― 計画 ― 実践 ― 評価の一連の過程を学習するに際し，学生が習得できたとする能力は，看護過程の後半に至るほど稀薄になっている。三年次における各科別実習では表1のようなコマ組みに従ってローテーションにより実習を行ったが，この方法ではケースとの出合いをもつ度に観察からスタートするため，学習の展開速度が遅いと定められた期間内に実践，評価，計画の修正にまで至ることなく終ってしまう。実務看護婦は極めて早くこのサイクルを行うかもしれないが，学生が基礎知識に照しながら1つ1つのステップを思考活動として進めて行くためにはかなりの時間が必要とってくる。従って非常に短い期間に沢山の内容をこなすように要望されている結果となり学生は消化不良に陥っているのではなかろうか。加えて①導入の不適切，②学生の基礎的知識の不充分，③現場に看護計画の成文化された手本が少ない，④教員の不足，⑤実習病院への気がねなどの要因が，学習の達成を妨げていると考えられる。

看護学総論が単に机上の空論にとどまらず，実習教科の中に展開されて自分のものとして人格化の域にまで高められるためには43年度来採用してきた実習のあり方を次のような図式に改めるのがよいのではなかろうか。

図1　実習構造にみられる変化



さまざまな制約の多い中で理想へ向うことはむづかしいかも知れないが，49年度をふりかえってみて問題となる事項につき今後のありようを探索した。

参 考 文 献

1) 池田・小玉著；岡山県立短期大学紀要１５号，１９７１年。
2) 鈴木敦省他著；看護教育評価の実際，医学書院。
3) ウィーデンバック著；外口玉子・池田明子，臨床看護の本質，現代社１９６９年。